嬉野のこと

岡本浩人（当時、加東郡社町在住　10 歳頃の話）

嬉野を開墾するよう指示があって、強制的に一家に三畝の荒れ野が割り当てられた。三畝の畑を、竹の根が張りつめたものを引き起こして開墾するのはなかなか大変だった。作物が出来だしてからは、薩摩芋もキュウリも茄子もよく出来たが、それまでが大変だった。忘れられないのは、自転車の荷台に肥たご（人糞）二個をぶら下げ、町内を抜けて嬉野まで運んでいた苦労。少年にはきつく辛かった。

嬉野にグライダーの滑空訓練の学校があって、生徒が二百何十人か居たと後に知った。町から隔絶した野原の方で、見に行くこともなかったので、よくわからない。そんなに大勢の生徒がいたのか、と思う。生徒は小学校高等科二年を出てから、というのだろうか、その少し上の年齢であれば入隊可だったらしい。十六歳で少年航空隊にも入隊可能の時代だった。嬉野の滑走路は簡易舗装のような感じで、コンクリート製というような立派なものではなかった。

嬉野に鶉野と間違えて飛行機が下りてきて、滑走路が短いために山林の中に突っ込んでしまったらしい。どこから聞いたのか、大変だ、飛行機が燃えているらしいぞ、と聞いて、どこかと尋ねたら嬉野の滑走路に降りているらしいというので、それで飛んで行った。五機か六機の先頭機が雑木林に突っ込んで、逆立ち状になっていた。後続機はそれに追突していたが、小さい飛行機だった。グライダーの兄貴のような、「こんなちゃちなものか」と思うような飛行機だった。